
捨てられた、わけじゃない。

空猫月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てられた、わけじゃない。

【コード】

N8108X

【作者名】

空猫月

【あらすじ】

別の国から売られてきたリユート。

黒域の王子であるレント。

まわりのみんな、かけがえのない家族。

それぞれの深く強い絆。

心に闇を抱えながら、それでも明るく生き抜く人たち。

というようなことを描きだしていく予定です。

プロローグ

「よっしゃああああ」

網に獲物がかかった。

漢らしく雄たけびを上げるあたしに、うれしそうに微笑んでくれるのは黒域の王子。

只今、黒域の王子と悪夢狩りをしている。悪夢を捕まえるための網を片手に、暗黒の森を颯爽と駆け抜けていく。走っている時の風はすごく気持ちがいいし、隣に王子がいるから、もう最高。空まで跳びあがってしまいそうだ。

おっと、紹介を忘れていた。

王子の名は、レント。漆黒の髪と瞳をもつ、この国きつての美少年。控え目だけれど気が利いて、頭も運動神経もいいからとっても評判な王子。

ちなみにあたしは、リユート。女だけど漢まさりで、よく「綺麗な格好したら可愛いのに」と残念がられる。王子のお世話係だ。

今日は王の命令で、暗黒の森で悪夢狩りをしていた。最近、悪夢が繁殖しているという噂は耳にしていたけれど、ここまで増えているとは思わなかった。

ここで繁殖した悪夢は、国民にとりつく。悪夢にとりつかれた国民は狂ってしまい、最後には死んでしまう。それを阻止するために狩りをする。

「本当は、番人がいるんですけどね。」

「ついこの間、とりつかれちゃったからね。」

つぶやいた声に反応してくれたのは、もちろん王子。

そう、この番人が悪夢にとりつかれてしまい、しばらくここは

野放し状態になっていたんだ。

「もう少しだよ。あと三つくらいつかまえたら、帰ってご飯だ。残りは明日にしよう。」

世話係のあたしまで励ましてくれる王子。なんてやさしいんだろ
う。

「はい！」

あたしは力強くうなずいて、まだ悪夢がぐるぐるしている森へ走って行った。

リユートの闇

スツと、手を目の前に掲げる。

コンコンッ

ドアをノックするあたしの手は、爪が伸びていて野蠻に見えた。

「リユートか、入ってきなさい。」

「失礼します。」

大きくて重いドアをあけ、王の書斎に入る。王は、いつものように深く椅子に腰かけていた。

「お疲れ様。いま、和と連絡を取っていたところだ。」

低くて、穏やかな声。嫌いなわけじゃないが、なんだか苦手だ。

ナゴミ。

あたしがかつて、住んでいたところ。あたしはその土地で生まれ育ち、いまだに家族がいるところ。

「継続、だ。心配しなくも、リユートはここにいられるよ。」

リユートと呼ばれると、胸の奥がキュツと締まるような感覚に襲われる。あたしは昔、お龍、と呼ばれていたんだっけ。もう遠くなっただけの過去が、次々とあふれかえる。

「ありがとうございます。よろしくお願いします。」

胸の苦しさを抱え、形通りのあいさつをしながら王の書斎を出た。

自分の部屋に入ると、へなへたと足元が崩れた。ボタンと、ベツドに倒れこむ。

「あーあ。」

ホッとしている。けれど、つらい。

そもそも、和という国はとても小さい。資源もなく、これといっ

た技術もなく、今を生きるだけで精一杯な国。

貧乏で、子たくさん。

まさに、そんな国だ。なんとか保っていた財政は苦しくなるばかりで、いよいよ雲行きが怪しくなった和は、一つの政策を打ち出した。

それは、子供を売る、ということ。

子供しか資源のない国だ。こんな政策が出たのは仕方がない。

他国では少子化が進み、たくさんの企業や国で人出が足りなくなっていた。それを補い、なおかつ、自分たちの国を潤す政策。なかなか頭はいいと思う。

そのために、あたしは売られた。子売り、と呼ばれる政策にのっかった。

あたしがここにいて暮らすことで、国は潤い、家族にも金が送られる。国が潤えば、あたしみたいにつらい思いをする子供が減るだろうし、家族に金が送られていれば、貧乏のくせに子供が8人もいる家を守ることができる。

そう、あたしは納得済みで売られた。すべてを理解していて、売られた。

「でも。」

でも、でもでもでも。

苦しいことに変わりはない。家族と離れ離れになって、つらくないわけがない。

あたしは比較的、恵まれていると思う。

世界で最も豊かと言われる、七色という国。魔法という技術を駆使し、どこの国にもおよばはないような広い領土を持つ国。あたしは、たくさんの領域があるなかで黒の領域の城に仕え、召使でもなく、奴隷でもなく、世話係として使ってもらえている。王子はやさしく、王だっであたしを娘のように可愛がってくれている。

でも。

それが、家族と離れたことを埋めてくれるわけがない。

今でも、「お龍」と呼ぶ両親や、「お姉ちゃん」と駆け寄ってくる弟や妹が夢に出てくる。あの国のあの村で過ごした日々が、匂いから音から光からなにもかもが、ふっと一気に押し寄せてくる。あたしを押しつぶそうと、ものすごい勢いで駆けてくる。そんなとき、ふと思ってしまうのだ。

ここから解雇されて、家に帰りたいた。

「違う。」

解雇されたいだなんて、思わない。あたしがここにいることで家族が飢えをしのげるのなら、あたしはここにいるべきなんだ。あの国へ帰ってはいけないんだ。

もやもやとした思考をおさえるように、枕を抱き締める。だけれど、愛しい家族の匂いがするはずもなかった。

ふと、時計を見上げた。すると、

「うわあああ」

あたしとしたことが、王子との約束を忘れるなんて。明日の悪夢狩りの計画を立ててくはないのに。

バタバタとものすごい音を立てながら、あたしは王子の部屋までダッシュした。

闇があっても、外では明るく。

「王子！すみません、遅くなりました。」

ガンガンツと、ドアを叩く。

「あ、ちよつと待って。今、着替えてるから。」

「はい！！」

バンツと、背中をドアに押しつける。

怒られるかと思った。クビにされると思った。国に返されると思った。もちろん、王子や王がそんなことをするはずがないと、知っているけど。

「いいよー。」

間延びした声とともに、ずるりと背中が滑った。

「ひゃっ!?!」

悲鳴ともつかない小さな声とともに、

「つてええええ」

背中に激痛が走る。

状況はよくわからないが、床に倒れてしまったらしい。全体重を受け止めた背中が今、悲鳴を上げて泣いている。

「ほら、リユート。だめじゃない、寄りかかってきたら。」

手を差し出す王子の力を、あえて借りずに立ち上がる。

「全く、急に開けたらびっくりするじゃないですか。」

背中をさすりながら、かるく睨みつけるあたしを、王子は「全く、急に倒れてきたらびっくりするじゃないですか。」

といて受け流した。

そう、王子とはこんな関係。

あたしは、お世話係といっても女中じゃないから、どちらかといえば友達と言ったほうが近い。憎まれ口をたたくし、たたかれる。

ゆるくてやさしくて、心地よい関係だ。

「ぐだぐだと、あーでもないこーでもないと言いだす王子に、当たって砕ける、ですよー。」
などと適当なことを言うあたし。

結局、いつも通り。今日みたいになんとかやっていくか、という結論に至った。

部屋に帰って、入浴。そのあとは、机の上に積み上げられた本をもって、図書室へ。

そう、実はこのあたし。

城の中でも一番の読書家なのである。あの王子さえも、ぶつちぎって抜かしてしまっただけ。今では図書の小人とも仲良くなり、夜中でも特別に部屋を空けてもらえる。

「小人さーん。」

「図書室の前で叫ぶと、

「あいよー。」

と呑気な声が聞こえて、ドアが開いた。そこには、身長が155?をやっと過ぎたくらいしかないあたしの半分もない小人がいた。

「いらっしやい。」

ほっとするような笑顔を浮かべる小人に、にこやかな笑みを返す。

「はい！これ返します。」

カウンターに5冊の本を置くと、天井につきそうな高い棚の森へ入って行った。

ここにきて驚いたのだが、世の中には本というとても素敵なものがある。和にいるときは本なんて高価すぎて、読んだことも触ったことだっただけだった。

だからだろうか。

文字を読めるようになって、理解できるようになってから、あた

しは本にドツプリとはまっってしまった。

そして、もうひとつ驚いたことがある。

それは、本を守る小人がいる、ということ。本には、本の数だけ本を守るための小人がいるらしい。

ここには本が多いから、最初に図書室に入った時は、小人がうるうるしすぎて「なんじゃこりゃ!？」と声に出してしまった。今思い出しても、あれほど恥ずかしかったことはない。

昼間は一般公開されていて一般の人たちがよく遊びに来るが、夜に空けてもらえるのは王と王子とあたしくらいしかない。

ふんふんと、鼻歌を歌いつつ、小人と話をしながら本を選ぶ。

「はい、これ。」

カウンターでおとなしく待っていた小人に本を渡すと、

「あいよ。」

という声とともに、その本に入っていた小人たちが出てきた。

「よし、お前らの本は貸し出されるからな。」

寝ていたのだろうか。本から出てきた小人たちは皆、目をこすっている。そうこうしている間に、本を渡された。

「はい、お休み。」

「おやすみなさい!」

ドアが閉まるとともに聞こえた声に、精一杯の返事をして、自分の部屋まで走った。

と、思ったら。

「.....」

ストン、と急に床が消えて、王子の部屋にいた。

「ごめん。召喚魔法、使ってた。」

つまり、だ。

あたしは王子の魔法の練習で、ここに召喚されたらしい。

「人を運べたから、成功だよ。ありがとう。」

嬉しそうな王子の顔を見ると、何とも言えなくなるが、これだけは言っておきたい。

「入浴中だったらどうするつもりだったんですか!!」

「ごめん、ごめん。」

あやまる王子に、怒ったふりをしながらも笑ってしまった。

「気をつけてくださいね。」

お世話係という権利を振りかざして注意だけすると、本を抱えて部屋へ戻った。

その日は、借りてきた6冊のうち3冊の本を読んでしまい、寝た。

バタバタな朝

「王子ー!!」

ノックもせず、ドアを開ける。

「朝ですよ、起きてください。」

気持ち良さそうにベッドで寝ている王子を、これでもかと揺さぶる。

「ほら！王子ー!!」

「ん、まだ。」

「王子ー!!」

いつもは完ぺきな王子だけど、朝だけは弱いのだ。だから、この王子を起こすのが、あたしの仕事。簡単に見えて、なかなか骨が折れる。

「もう!」

いつまでたつても起きないので、カーテンを開けて部屋を明るくする。

散らかった衣類をかき集めて、散乱している教科書なんかもまとめてあげる。王子は、片付けも苦手なのだ。

「王子・・・って、王子!?!」

ふと、教科書に挟まっていたプリントを見て、驚愕する。

「召喚魔法のテスト!これ、今日じゃないですか!」

バンバンと王子をたたくと、やっと目をこすりながら起きてくれた。

「ほら、テスト!」

怒鳴ると、

「ん、ああ。そうだよ。」

「はあ!?!」

昨日悪夢狩りの計画、たてたのに?いや、大した計画でもないけ

ど……。

「ん、えとね。」

一人で思考をぐるぐるさせていると、

「悪夢狩りは、お昼から行こう。今日はテストだから、学校が昼までなんだ。」

「ふんふんとうなずく。わかっているようで、実は分かっていないが、

「でも、それだったら、悪夢は全部捕まえられないですよ。」
意見をしてみる。

昨日狩りに行ったから、あの悪夢は半日で狩り終わる量ではないことがわかる。それほどまでに、悪夢は増えているし、一日置いたことでまた増えているだろう。そして、昨日の計画では今日で狩り終わる予定だったんだ。

「うん。だから、何日かかけて頑張ろうか。」

「ええええ。」

バフツと、ベッドに突っ伏す。

「一日で終わると思ってたのに。」

「頑張れ。」

今の今までベッドでぐずぐずしていたくせに、いざ起き上がるとビシッとした王子モードに切り替わる王子。すごいとは思っけど、今ばかりは憎らしい。

「何日もあんなところいたくない。」

ぐずるあたしをよそに、王子は着々と着替えている。

「あそこ、たまにゾワツてるもん。なんか、嫌な感じるもん。」
ベッドに顔を伏せたまま、ぶつぶつ言っていると、頭に温かい掌がのった。

「じゃ、俺だけで行こうか。」

「いや。」

ガバツと顔をあげて、制服に着替えた王子を見る。

「ちゃんと着いていきますから、まずはご飯にしましょう。」

今までぐずぐずしてたくせに、と今度は自分に思う。

けれど、王子にはちゃんと着いていけないと無理をするから心配なんだ。それに、きつと自分だけで行くって言ってもあたしがついてくることを知っていて、王子はあんなことを言ったんだと思う。

「なんか・・・ずるい。」

「へ？」

「いいえ、なんでも。」

聞かれなくてよかった。

さて、大変なのはこれからだった。王子が急に、

「リユートも連れて行く。」
と言いだした。

なんと、昼までで学校が終わるから、そのままあの暗黒の森へ行くつもりらしい。ということ、一緒に狩りをするなら、リユートも学校へおいでよ、ということになった。王子がテストを受けている間、あたしは図書室にいればいいらしい。
となると、

「コック長、お弁当二つ！あ、女中さん！洗濯物、お願いします。」
などと、あたしが走り回るハメになった。

お昼ご飯はともかく、洗濯は朝自分でしようとおもっていたのに。昨日の狩りで葉っぱもいっぱいくっついていて、穴もいくつかあいてしまったから、繕い物もしなくちゃいけないのに。

「王子！」

なんとか準備も終わり、王子の部屋行く。

「お疲れ様、乗って。」

全開にした大きな窓の前で微笑む王子は、箒にのって少し浮いて

いる。

「はい！」

魔法が使えないあたしは、どこか遠くに行くときはいつも王子の後ろに乗せてもらう。

ふらふらと空中を漂う王子の後ろに横座りになると、箒は一気に前へ進んだ。耳元で鳴る、風を切る音がちよつと冷たい。

「学校か……。」

まだ、学校というものを知らないあたし。

ななが待っているのか、わくわくする。でも、その一方で不安でもあった。

不思議な学校

「もうすぐ着くよ。」

王子の声で、はっと我に返る。

地上の景色に見とれていて、今ここがどこだか忘れていた。

「はい、下りまーす。」

なんだか楽しそうな王子の声とともに、幕が急降下する。

「……………」

ゾワゾワゾワツツと、内臓が浮くような不快感が押し寄せる。気持
ちが悪くて、鳥肌が立つ。

まったく、いつになってもこれだけは慣れない。

「フツツ」

ようやく地に足が付き、ホツと胸をなでおろしていると、隣から
王子の笑い声が聞こえる。

「いい加減、慣れなよ。」

「無理！」

即答した。

絶対からかったな。王子の性悪め。

王子に怒りながらも、キョロキョロとあたりを見回す。

初めての、学校。すべてが新しく、なんとなく落ち着かな。聞
いたところによると、たくさんの子供が、たくさんで、みんな
な一斉に勉強しているらしい。

自分だったら出来ないな、と思う。あたしの国にも学校と呼ばれ
るものがあつたが、そんなところで勉強するくらいなら、働きに行
っていた。

「ここはまだ校門だからね。向こうまで歩くよ。」

王子が、80mほど先を指さす。

なるほど、隣を追い越していく生徒のほとんどが、王子の指さした場所に向かって行っている。

「あれ、入口ですか？」

あたしが聞くと、

「そう。俺らは昇降口についてるけど。」

と、王子は笑いながら答えてくれた。

生徒たちの甲高い笑い声を聞きながら、昇降口までのみちを二人で歩く。

二人とも黙ったままでいると、

「レントー！」

という声が聞こえた。

振り返ってみると、手をぶんぶんと振っている、白髪の女の子。

その後ろには、金髪の女の子と赤髪の男の子がいた。

なんだか、違和感。いつもはあたしだって、王子と呼んでいる。学校には、王子を名前で呼べる人がいるのか。違和感と驚きが入り混じって、なんとなく微妙な気持ちになった。

とにかく、あれは誰だろうと首をかしげていると、

「クラスメートだよ。」

と王子が教えてくれた。

「あの白髪がファル。金髪がミュンランで、赤いのはサイア。みんな、色域の姫や王子なんだよ。」

「ほうほう。」

たしかに、みんなの制服には七色王家の紋章が入っている。もちろん、王子にも。七色は髪の色で出身域がわかるから、ファルは白域、ミュンランは黄域、サイアは赤域なのだろう。

一人でうんうんと唸っているうちに、三人があたしたちの元へ来た。

「レント、この人だれ？」

無邪気に聞くファルに、

「失礼でしょ。」

とたしなめたのはミュンラン。

ちよつと後ろのほうで、怪訝そうにあたしを見ているのはサイアだ。

「はじめまして、リユートと言います。レント王子の世話係をしております。」

とりあえず、当たり障りのない言葉で自己紹介をした。

ファルは、瞳をキラキラさせて、

「はじめまして！」

と言ってくれた。ミュンランは握手を求めてきて、サイアは無言で会釈。

なんだか、個性豊かな人たちだ。

「さ、行くぞ。」

王子の一言で、四人が歩き出す。あたしも置いていかれないように、あわててついていった。

教室、という部屋の前で分かれた王子は、そのままあたしを図書室へ連れていく。

「ここで待っててね。終わったら、迎えにくるよ。」

城の図書室よりは小さく、本も少ない学校の図書室。けれど、なにもしないで待つよりはずっといい。

カウンターに座っていた小人に一礼して、あたしは本を漁り始めた。

放課後のハント

「リユート」

王子の声がして、あわてて本を棚に戻す。

「はあい。」

ちよつと間抜けな返事をして、本の森から出ると、

「・・・」

どう反応していいのか分からない。

そこには、ファルとミュンランとサイアがいた。

「三人が、リユートと話してみたと言って言うから。」

王子のやさしい声に、頭が真っ白になった。

あたしは、いつも弱い。

見知らぬ人に出会つと、愛想笑いしかできなくなる。

体中を点検されているみたいなの不快感。異国からの人間だとい

居心地の悪さ。そして、売られたという事実、帰りたいという本心

を見抜かれてしまいそうで。

売られたからって何が悪いんだ。と、開き直すこともできる。

でも、それは何の解決にもならない。

売られたということと世間の目が痛くなることは確かだし、汚れたようなものを見るような目でしかあたしを見てくれなくなる人だっている。

幸い、和の国は髪が黒か茶のことが多い。ひよつとしたら、黒域の人間だと思われるかもしれない。

「リユート、だいじょうぶだよ。」

そつと背中を押してくれる王子の手が暖かい。

王子は、あたしのこの思いを”人見知り”としてとらえている。

でも、王子にいくら優しくされたところで、この思いが消えるわけではない。

所詮、あたしは異国から売られた娘なのだから。

「暗黒の森にいくんでしょう。」

「お勤め御苦労さま。」

ファルとミュンランが交互に言う。

説明してなかったかもしれないけど、暗黒の森は危険だから、入れるのは黒域で高い悪夢狩りの技術を取得している人だけなんだ。

あたしは黒域の人間ではないけど、王子と一緒にいるならということが入ることを許可されている。

「いつもレントから話を聞いてるんだ。」

「今度は、お茶会でもしましょうね。」

ファルとミュンランはよほど仲がいいのだろう、いつも交互にしゃべっている。そして、それに違和感が全くない。

ニコツと、うまく笑えているかあまり自信のない笑顔を返した。

外へ出て、王子の後ろに乗って暗黒の森へ行く。

相変わらず、王子はあたしを下ろす時に怖がらせようとす。

「王子、いい加減にしてください!」

と怒ってみるも、

「はいはい。」

暖簾に腕押し状態。

気を取り直して、網を構えて森へと入る。

「.....」

息を殺して、悪夢が出てくるのを待つ。

シュツと、悪夢が移動する音を聞きつければ、素早くそちらに走って行って捕獲。

幾度となく繰り返し返した作業だけれど、なんとなく今日はいつもより手ごたえが少ない。

「王子……」

「ああ、ちよっとおかしいな。」

悪夢が、少ないような気がする。

もちろん、たくさん捕まえた。けれど、昨日の様子じゃ、もっともっと捕まえられるはずだったのに……。

それに、捕まえられる悪夢がすべて小さいのも、気になる。昨日はもっと大きいのがうるちよろしてたし、一日たっているんだから昨日よりは大きくなっていないとおかしい。

「父さんに相談しよう。今日は下手なことをしないほうがいい、帰ろうか。」

王子の一言で、今日そのまま帰った。

悩んでもしかたないでしょう。

「うーん。」

首をひねる。

「うーん。」

王子も一緒に首をひねる。

「うーん。」

王が違う意味で首をひねる。

「あのねえ。」

王が、やっと口を開いた。

「たぶん、魔物の口が開いちゃったんだな。」

「え……。」

王子がすごく驚く。その傍らで、あたしはなんのこっちゃわからない。

「私たちが行ったほうがいいんだろ？、仕事が忙しくて……。」

「それは、俺たちに行けということですか！」

王子、王。何を言っているんですか。まったくもって理解できていません。

と、心の中で叫んだのに。

「そういうこと。手順はわかっているだろう。よろしく。」

「お父様……！」

わけがわからないまま、会話が終了してしまった。

「王子、王子。」

部屋を変え、いまだに悩んでいる王子に話しかける。

「全く理解できてません……！」

「ああ、そっか。」

やっと、王子が話してくれることになった。

「なるほど。」
つまり。

この黒域は、黒魔術とか魔物とか、そういう闇の世界のものを封印する領域である。ということ、闇のものを封じている社が暗黒の森にある。俗に”魔物の口”と呼ばれているが、ま、そんなことはどうでもいい。問題は、今、その魔物の口が開いていること。魔物の口が開くと、この世界に黒魔術やら魔物やら、今日ハントしに行つた悪夢が世界中に飛び出していく。となると、どうなるか。

「かなりやばいですね……。」
世界崩壊の危機。

「そうなんだよ……でね。」
この話には、まだ続きがあつた。

その魔物の口を封印する方法それは、
「七色の王家みんなを集めること。」

そして、魔物のボスが出す試練に耐えるんだとか。
「なんと面倒な。そして、なんとファンタスティックな。」

思わず、眉をひそめた。
だって、七色というだけあつて七つの領域がある。その王家を集めるとなると、絶対一人じゃなくてお付きの人がくる。ということ
は、二十人近くあつまるわけだ。

「あたしの兄弟より多い……。」
想像がつかない。

「いや、人数はいいんだけどね。」
あれ、そうでしたか。てっきり勘違いをしていた。

「試練っていうのが面倒なんだよ。」
「……でしょうね。」

そんな、ありがちな小説じゃあるまいし。なんで試練なんてのりこえなくちゃならんのか。

「はあ。」

「ふう。」

二人揃って、ため息をついた。

「ま、悩んでいても仕方ないし。」

突っ走る用意をしましょう、王子。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8108x/>

捨てられた、わけじゃない。

2011年11月20日03時29分発行